



kaminorippo.org

付録8f: 聖餐 — イエスの最後の晚餐は過越であつた

このページは、エルサレムに神殿が存在していた時にのみ守ることが可能であった神の律法を探究するシリーズの一部です。

- [付録8a: 神殿を必要とする神の律法](#)
- [付録8b: いけにえ — なぜ今日それを守ることができないのか](#)
- [付録8c: 聖書の祭り — なぜ今日そのいずれも守ることができないのか](#)
- [付録8d: 清めの律法 — なぜ神殿なしでは守ることができないのか](#)
- [付録8e: 十分の一と初物 — なぜ今日それらを守ることができないのか](#)
- [付録8f: 聖餐 — イエスの最後の晚餐は過越であつた](#)(現在のページ)。
- [付録8g: ナジル人と誓願の律法 — なぜ今日それらを守ることができないのか](#)
- [付録8h: 神殿に関わる部分的・象徴的な服従](#)
- [付録8i: 十字架と神殿](#)

聖餐は、このシリーズが暴いている事実を最も強く示す例の一つです。すなわち、神が神殿、祭壇、レビ系祭司職を取り除かれたことで守れなくなった戒めの代わりとして、人が発明した象徴的な「服従」が広く受け入れられている、という現実です。神の律法は、いけにえや過越の代わりとして、パンとぶどう酒の儀式を定期的に繰り返すよう命じたことはありません。イエスは神殿の律法を取り消されませんでしたし、それらに代わる新しい儀式を制定されたこともありません。今日「主の晚餐」と呼ばれるものは、トーラーの戒めでも、神殿と無関係に守れる神の律法でもありません。それは、イエスが最後の過越でなさったことを誤解した上に築かれた、人間の儀式です。

律法の型: 実際のいけにえ、実際の血、実際の祭壇

律法の下で、赦しや記念は、いけにえなしの象徴に結びつけられたことは一度もありません。中心となる型は明白です。罪は、神が御名のために選ばれた場所にある実際の祭壇で、実際の血がささげられるときに扱われるのです(レビ記 17:11; 申命記 12:5-7)。これは日々のささげ物、罪のいけにえ、全焼のいけにえ、そして過越の子羊そのものにも当てはまります(出エジプト記 12:3-14; 申命記 16:1-7)。

過越の食事は、自由形式の追憶式ではありませんでした。それは神の命令による儀式であり、次を伴っていました。

- 傷のない、実際の子羊
 - 出エジプト記 12:3 — 各家は、神の命令に従って子羊を取らなければならない。
 - 出エジプト記 12:5 — 子羊は傷のないもので、一歳の雄の完全なものでなければならぬ。
- 実際の血 — 神が命じたとおりに扱われる
 - 出エジプト記 12:7 — 子羊の血を取り、門柱と鶴居に塗らなければならない。
 - 出エジプト記 12:13 — 血はしるしとなり、実際の血が塗られた所だけを、神は過ぎ越される。
- 種なしパンと苦菜
 - 出エジプト記 12:8 — 子羊を種なしパンと苦菜と共に食べなければならない。
 - 申命記 16:3 — 七日間、パン種の入ったパンを食べず、苦しみのパンだけを食べなければならない。
- 特定の時刻と順序
 - 出エジプト記 12:6 — その月の十四日の夕暮れに子羊を屠らなければならない。
 - レビ記 23:5 — 過越は第一の月の十四日、定めの時である。

後に神は過越を中心化されました。子羊はいかなる町でもほふってよいのではなく、神が選ばれた場所で、御前の祭壇で献げるほかありませんでした(申命記 16:5-7)。体系全体が神殿に依存していました。いけにえのない過越の「象徴」など存在しなかったのです。

イスラエルはどのように贖いを記念したか

神ご自身が、イスラエルがエジプトからの脱出をどのように記念すべきかを定められました。それは、単なる默想や象徴的身振りではなく、神が命じられた年ごとの過越の奉仕によってでした(出エジプト記 12:14; 出エジプト記 12:24-27)。子どもたちは「この奉仕は何を意味するのか」と問うようにされ、その答えは、子羊の血と、その夜に神がなさった御業に結びつけられていました(出エジプト記 12:26-27)。

神殿が立っていた時、忠実なイスラエルは、エルサレムに上り、聖所で子羊を屠り、神が命じられたとおりに過越を食べることで従いました(申命記 16:1-7)。預言者の誰一人として、これがいつか、諸国に散らばる建物の中で、パン一切れとぶどう酒(またはジュース)一口に置き換えられると告げたことはありません。律法はこの置き換えを知りません。律法が知るのは、神が定義された過越だけです。

イエスと最後の過越

福音書は明確です。イエスが裏切られる夜に弟子たちと食卓につかれたとき、それは新しい異邦人の儀式ではなく、過越でした(マタイの福音書 26:17-19; マルコの福音書 14:12-16; ルカの福音書 22:7-15)。イエスは父の戒めに完全に従い、神が定められた同じ過越を守っておられました。

その食卓で、イエスはパンを取り「これはわたしのからだである」と言い、杯を取り「契約の血」について語られました(マタイの福音書 26:26-28; マルコの福音書 14:22-24; ルカの福音書 22:19-20)。それは、過越を廃し、いけにえを取り消し、異邦人のために新しい礼拝法を制定することではありませんでした。律法がすでに命じていたすべてのことが、ご自身の死によって完全な意味を得るのだ、と説明されたのです。

イエスが「わたしを覚えて、これを行ひなさい」と言われたとき(ルカの福音書 22:19)、その「これ」とは、彼らが食べていた過越の食事です。律法、神殿、祭壇から切り離された、まったく新しい儀式ではありません。イエスの口から、諸国のために、独自の予定、独自の規則、独自の聖職者を持つ神殿に依存しない儀式を制定する命令は出ていません。イエスはすでに、ご自身が律法や預言者を廃するために来たのではなく、律法の最も小さな一画でさえ失われないと語っておられました(マタイの福音書 5:17-19)。イエスは「わたしの死後、過越を忘れ、どこででもパンと杯の儀式を作れ」とは一度も言われませんでした。

取り除かれたのは神殿であり、廃されたのは律法ではない

イエスは、神殿の破壊を予告されました(ルカの福音書 21:5-6)。それが西暦70年に起きたとき、いけにえは止み、祭壇は失われ、レビ系の奉仕は終わりました。しかし、これは律法の廃止ではありません。裁きです。いけにえと過越に関する戒めは、今も書かれたまま、手つかずで残っています。ただ、神がそれらが機能する体系を取り除かれたため、守ることが不可能になっただけです。

人々はどうしたでしょうか。神が聖所を回復されるまで守れない律法があることを、恐れとへりくだりをもって受け入れる代わりに、宗教指導者たちは新しい儀式——聖餐——を作り出し、この発明こそがイエスを「記念し」、その犠牲に「あずかる」道だと宣言しました。過越の食卓にあったパンと杯を取り出し、神殿の外で、律法の外で、神が命じていない形で、まったく別の構造を築いたのです。

なぜ聖餐は象徴的服従なのか

聖餐はほとんどどこでも、神殿のいけにえと過越の代替として提示されています。人々は、教会堂でもどんな建物でも、パンを食べ、ぶどう酒(あるいはジュース)を飲むことで、キリストの命令に従い、律法が指示したものを作り出しています。しかし、これは神が認めていない象徴的服従そのものです。

律法は、祭壇も血もない象徴が、命じられたいけにえに取って代われるとは決して教えません。イエスも言つていません。預言者も言つていません。そして、次を定義する律法はどこにもありません。

- この新しい聖餐を、どれほどの頻度で行うべきか
- だれが司式すべきか
- どこで行うべきか
- 一度も参加しない者に何が起こるのか

これらの詳細はすべて人が作ったものです(マルコの福音書 7:7-9)。この儀式の上に、神学が積み上げられました。ある者は秘跡と呼び、ある者は契約更新と呼びます。しかし、そのどれも、神の律法からも、福音書の文脈の中で理解されたイエスの言葉からも出てきません。

結果は悲劇です。大勢の人が、神が命じてもいい儀式に参加することで神に「従っている」と信じています。真の神殿の律法は今も立っていますが、神が神殿を取り除かれたため、守ることはできません。ところが人々は、恐れとへりくだりをもってこの事実を尊ぶ代わりに、象徴的な儀式がその場所に立てるかのように装い続けるのです。

新しい律法を発明せずに、イエスを覚える

聖書は、メシアが昇天された後、私たちがどのように彼を尊ぶべきかについて導きを残しています。イエスご自身は、「あなたがたがわたしを愛するなら、わたしの戒めを守る」と言われました(ヨハネの福音書 14:15)。また、「なぜ、わたしを『主よ、主よ』と呼びながら、わたしの言うことを行わないのか」とも言われました(ルカの福音書 6:46)。

イエスを覚える道は、発明された儀式ではなく、メシア以前に預言者たちを通して父が語られたすべてのことと、メシアご自身が語られたすべてのことに従うことです。

守れるものは守り、守れないものは尊ぶ

律法は手つかずのまま残っています。過越といけにえの体系は、永遠の掟として書かれたままで。しかし、神ご自身が神殿、祭壇、祭司職を取り除かれたため、今日その服従は不可能です。聖餐はこの現実を変えません。象徴的なパンと象徴的なぶどう酒を服従に変えることはできません。神殿の律法を成就することもできません。それはトーラーから出たものではなく、イエスが諸国のために新しい独立した定めとして命じられたこともありません。

私たちは今日、守れるものは守ります——神殿に依存しない戒めです。守れないものは、代用品を発明しないことで尊びます。聖餐は、神がご自身で作られた空白を、人が埋めようとする試みです。主を恐れる真実の心は、この服従の幻を退け、神が実際に命じられたことへ立ち返らせます。